

# 談話標識の出現傾向からみた 韓国人日本語学習者の談話展開の方法\*

－日本人母語話者との比較を中心に－

琴 鍾 愛\*\*

(e-mail: jakeum@cnu.ac.kr)

---

## 目 次

---

- I. はじめに
  - II. 先行研究とその問題点
  - III. 談話標識、談話展開の方法とは
  - IV. 研究方法
    - 1. 調査概要 2. 分析方法
  - V. 韓国人日本語学習者の談話展開の方法
    - 1. 談話標識とその機能 2. 事例分析 3. 使用頻度
  - VI. 日本人母語話者の談話展開の方法
    - 1. 談話標識とその機能 2. 事例分析 3. 使用頻度
  - VII. 考察
  - VIII. まとめと今後の課題
- 〈参考文献〉
- 

## I. はじめに

韓国語と日本語は語順などの文法構造が類似しているため、韓国人日本語学習者はほかの言語圏の学習者に比べ、日本語の習得が比較的はやく、上手だと言われている。しかし、長年日本語を学習し、日本語が流暢であるにも関わらず、実際日本人母語話者とのコミュニケーションにおいて誤解や摩擦を経験したという話をよく聞く。それは、アクセント

---

\* この論文は2013年度政府（教育府）の財源で韓国研究財団の支援を受け、研究されたものである（NRF-2013S1A5A8024123）。

\*\* 忠南大学校日語日文学科副教授、日本語学

や発音、語彙、文法などの言語的側面での要素は習得できても、日本人特有のコミュニケーションスタイル、つまり、談話展開の方法は習得できなかったからなのではないか。

本研究では、韓国人日本語学習者と日本人母語話者のコミュニケーションにおいて生じる誤解や摩擦の要因が言語的側面以外の要素、すなわち、コミュニケーションスタイルにもあるのではないかと考え、その実態を明らかにするため、韓国人日本語学習者と日本人母語話者の談話資料を収集し、談話標識の出現傾向から談話展開の方法の違いを明らかにする。具体的には話者がどのような談話標識をどのように使用しながら話を進めているのか、その共通点と差異点を考察することによって、両話者のコミュニケーションで生じる誤解や摩擦の要因を明らかにし、両国の円滑なコミュニケーションに役立ちたい。

## Ⅱ. 先行研究とその問題点

談話展開の方法を扱った研究には、メイナード (1997)、川口 (1998)、佐藤 (1996)、河内 (2009) などがある。メイナード (1997) は主に書き言葉を中心に日本語の談話を分析し、日本語の談話の特徴を「パトスのレトリック」と命名した。この「パトス」とはいわゆる「ロゴス」に相對するもので、一般的に「ロゴス」は男性原理であるのに対し、「パトス」は女性原理であり、西洋と東洋を比較する際にも前者が「ロゴス」的、後者が「パトス」的であると言われるものである。

川口 (1998) は、その「パトスのレトリック」の中の「終わりで『結ぶ』」という項目に注目し、日本語の談話展開方法の傾向として談話の論旨や話者の意見を伝える文は談話の終わりにくるということを検証し、その理由として日本人の意識の中には「もっとも大切なものには直接触れるべきではない」という美意識に似たものが存在すると述べている。

佐藤 (1996) では「談話展開の2つの型」について述べており、「叙述型テキスト」「指示型テキスト」がそれに該当する。「叙述型テキスト」とは新聞・雑誌の記事や小説などの「物語」のジャンルに属するテキストが典型的なものであり、形式上には平叙文の連続、内容的には「出来事の報告」や「登場人物・場面の描写」が相当する。それに対して「指示型テキスト」は調理法や取扱説明書がその典型であり、形式上には命令文の連続、内容的には各種の指示に相当するものである。

河内 (2009) は親しい友人同士の雑談の談話において、話題がどのように展開していくのかを述べている。

以上で述べたように、談話展開の方法に関する研究は、主に内容（本研究における情報内容）や話題を扱った研究が多く、談話展開の方法といえば、一般的にそれを指す場合が多い。また、久木田 (1990) は文の内容（本研究における情報内容）が主観的で

あるか、客観的であるかによって、東京方言と関西方言の談話展開の方法を各々「主観直情型」「客観説明累加型」であるとしており、沖（1993ab）は、各地点の「祝言のあいさつ」表現の談話を構成している「要素」を抽出し、その組み合わせで「談話型」を記述しているが、これらの研究もやはり内容に注目した研究である。

しかし、以上で紹介したような内容を対象にした研究の客観的分析方法は難しく、未だに確立していないと考えられる。特に、久木田（1990）、河内（2009）のように、ひとまとまりの談話全体を取り上げた話し言葉の談話は、どのような話題が選ばれるかによって、その内容が左右されやすく、同じ条件での比較が非常に困難であると考えられる。

琴（2005）ではこのような問題点を踏まえ、話題の影響を受けにくく、具体的形式として客観的分析が可能であると考えられる談話標識の出現傾向に注目し、東京方言、大阪方言、仙台方言の談話展開の方法の違いを明らかにしている。

しかし、本研究で扱うような韓国人日本語学習者の談話展開の方法を日本人母語話者との比較によって明らかにした研究は管見の限りない。

そこで、本研究では韓国人日本語学習者が日本人母語話者で行う会話場面、その中でも特に、相手の情報要求に対して説明を行っている説明的場面において、韓国人日本語学習者がどのような談話標識をどのように使用し話を進めるのかを日本人母語話者との比較を通して、明らかにする。

### Ⅲ．談話標識、談話展開の方法とは

談話標識とは談話の中で情報内容とは直接関わっていないが、「情報の内容理解を助ける」「会話者間のやりとりをよりスムーズにする」「会話者間の人間関係を円滑にする」

（西野1993）など、話者が効果的な情報伝達のために使う形式であり、品詞という既存の文法カテゴリーを超え、様々な言語形式から成り立つものである（Fraser1990、Schiffrin1987）。

日本語では、接続詞、間投助詞、終助詞、副詞、感動詞、応答詞などが談話の中で談話標識として重要な役割を果たしているが（田窪1992、西野1993、三牧1993、メイナード1993）、本稿では説明的場面において、特に高い頻度で使用される談話標識を取り上げ、考察を進めることにする。

談話展開の方法とは、先行研究で紹介したように、その情報内容に直接関わるものではなく、その内容を効果的に伝えるために話者が使用する談話標識に注目したものである。つまり、説明的場面において、話者がいかなる種類の談話標識をどのように使用して話を進めていくのか、その方法を指す。

## IV. 研究方法

### 1. 調査概要

本稿で使用する資料は筆者が2010年2月から2013年8月まで収集したものである（フォローアップインタビュー資料を含む）。

インフォーマントは韓国人日本語学習者の女性（JLF）4名、東京や首都圏の母語話者の女性（JNF）4名である。韓国人日本語学習者はいずれも学習歴5年以上、滞在歴3年以上の上級日本語学習者で、日本人母語話者と自由に会話ができる話者である。

調査は研究者は参加せず知り合いの韓国人日本語学習者、あるいは、日本人母語話者に親しい日本人母語話者、韓国人日本語学習者と30分から1時間ほど、自由会話をしってもらう方法で行った。資料は話者が話し始めてから約10分から20分ほど経た、話者があがる程度リラックスした状況で話した約4時間ほどの会話資料を文字化したものである。

### 2. 分析方法

本稿では、次の分析方法によって論を進める。

- (1)まず、韓国人日本語学習者と日本人母語話者の談話資料で使用される談話標識について、その機能を検討する。
- (2)次に、各話者の談話標識の出現傾向を具体的事例とともに示す。すなわち、
  - ①談話展開の特徴を典型的に表していると思われる談話資料を取り上げ、話者がどのような談話標識をどのように使用し話を進めているのか、談話展開の具体的事例を示す。
  - ②談話標識の出現頻度を全て示すことで、談話標識がどれくらい使用され、談話が展開するのかを検討する。
- (3)最後に、談話標識の出現傾向から韓国人日本語学習者の談話展開の方法を日本人母語話者との比較を通して明らかにする。

## V. 韓国人日本語学習者の談話展開の方法

### 1. 談話標識とその機能

韓国人日本語学習者は説明的場面において、「ダカラ」「ソレデ」（以上、接続詞）、「ヤハリ」（副詞）、「ネ」（感動詞・間投助詞・終助詞）、「デショー」「ヨ

ネ」「ジャナイ」(終助詞・助動詞など)のような談話標識を使用し、話を進める傾向がある。これらの形式の品詞は以上の括弧内に記したように様々であるが、いずれも効果的な情報伝達に役立っていると考えられる。そこで、あらかじめこれらの談話標識の機能について琴(2005)を参考し、考察を行った。ここでは、その結論のみを表1として示す。

この表には各談話標識の代表形、機能を記した。「ネ」<sup>1)</sup>は感動詞、間投助詞、終助詞の三つの品詞にまたがるので、代表形欄の括弧に略語でその区別を表示した。

表1 韓国人日本語学習者が使用する談話標識とその機能

代表形	機 能
ダカラ	発話権取得・維持：談話の最初に現れ、相手の情報要求に対して発話権を受ける。また、談話の途中に現れ、続けて話を進めようとする意志を相手に示すことで、発話権を維持する。
ソレデ	説明開始・累加：話の先頭に現れ、説明を開始する。また、談話の途中に現れ、説明を続ける。
ネ(間・終)	引き込み：そこまでの話を相手が理解しているかを確認、相手を話の中に引き込みながら話を進める。
ヤハリ	情報共有表示：情報の共有を前提に話を進めていることを相手に示す。
デショー(ノ) / ネ(ノ)(感・終) / ヨネ(ノ) / ジャナイ	情報共有確認：相手に情報の共有を積極的に求め、確認を行う。
ネ(ノ)(感)	念押し：情報の共有を再確認し、念を押す。

以下では、このような談話標識の出現傾向について見ていく。まず、談話の具体的事例を観察し、次いで談話標識の出現頻度を示す。

## 2. 事例分析

ここでは調査で得られた談話資料の中から、韓国人日本語学習者の談話展開の特徴

1) 「ネ」の用法については、琴(2008)を参照されたい。

を典型的に表すと考えられる次の2場面を取り上げ、考察を進める。

### 資料1

JNF：また、なんか、でもさ、日本に来たいって思う？

JLF：いや、日本ってやっぱり、ま、普通の観光としてもすごく行くところ多いんじゃないんですか。

JNF：まあ、ねえ。

JLF：だから、私、ま、行けないところが多くて。

JNF：私でもだって、行ってない県とかあるもん。

資料1から韓国人日本語学習者（以下、話者）は「日本に来たいと思うのか」についての日本語母語話者（以下、相手）の情報要求に対して、「ヤッパリ」「ジャンイデスカ」「ダカラ」などの談話標識を使用し、話を進めていることが分かる。まず、話者は「ヤッパリ」を使うことで、「日本は観光で行くところが多い」という情報の共有を前提にしていることを相手に示すことで、相手と共有情報のもとで話を進めようとしている。さらに話者は「ジャンイデスカ」などのように情報の共有を確認するマーカ―を共に使用し、その情報の共有を確認することで相手と情報共有のもとで話を進めようとしていることが分かる。また、話者は「ダカラ」で続けて話を進める意志を示すことで発話権を維持し、話を続けている。

### 資料2

JNF：あ、飲み放題、あ、そっか。  
日本飲み放題もあるよね（↗）、たしかね。

JLF：そうですね。  
飲み放題のレベルが違うんですね、韓国と。  
ええ、韓国って飲み放題あるのかな、ま、焼酎だけだとしても。

JNF：私は見たことないな、とりあえず。

JLF：私もないんです。

JNF：いや、でも、韓国で飲み放題にしてはみんなkage（店）、あ、店がつぶれる。

JLF：なんか、肉のビュッフェあるんじゃないですか。

そこ、そのビュッフェが、ええ、〇〇大じゃなくて、ソウルのどの大学の前に、ま、新しくオープンして、なんか、その大学が運動部がとて多い大学で、ま、オープンした、オープンした日に、ま、柔道部、その次の日に、ま、テクォンド部、その次の日に、ま、サッカー部が行って、ま、三日につぶれたと言う、すごいんですね。

JNF：そうだねえ、やっぱり

資料2から話者は「ネ」「ジャンイデスカ」などの談話標識を使用し、話を進めていることが分かる。まず、話者は「ネ」で相手を話の中に引き込みながら話を進める。また、話者は「ジャンイデスカ」などのように情報の共有を確認するマーカーを使用し、情報の共有を確認することで相手と情報共有のもとで話を進めようとする傾向が認められる。

このような談話展開パターンは韓国人日本語学習者の多くの談話資料から見られる。

次の3では、採集した談話資料全てについて、これらの談話標識の出現頻度を提示し、量的な検討を行う。

### 3. 使用頻度

今回、対象にした韓国人日本語学習者の談話標識の出現頻度を調べた結果をまとめたのが表2である。表の縦軸にはインフォーマントとその話者から採集した総文数を括弧に入れて記し、横軸には各話者別の談話標識の出現数と1文当りの平均出現数を記した。1文当りの平均出現数は次の方法によって算出したものである。

$$\frac{\text{談話標識の総出現回数 (延べ数)}}{\text{文数}} = \text{1文当りの平均出現数}$$

例えば、表2のKJF1という話者は498の文の中で、14回（ダカラ）で発話権を取得・維持しながら話を進める。また、6回（ソレデ）で説明を開始・累加し、120回（ネ）で相手を話の中に引き込みながら話を進める。さらに、5回（ヤハリ）で情報の共有を前提に話を進めていることを相手に示し、46回（デショー（ノ））などで情報の共有を確認、

4回（ネ（↗））で念を押しながら話を進めている。

表2 韓国人日本語学習者の談話標識の出現頻度

談話標識 と機能 話者 (総文数)	ダカラ	ソレデ	ネ [引き 込み]	ヤハリ [情報 共有 表示]	ジャンナイ(↗) [情報 共有 確認]	ネ(↗) [念 押し]
	[発話権 取得・ 維持]	[説明 開始・ 累加]				
KJF1 (498)	14=0.03	6=0.01	120=0.24	5=0.01	46=0.09	4=0.01
KJF2 (231)	3=0.01	5=0.02	10=0.04	7=0.03	15=0.06	0
KJF3 (225)	2=0.01	0	55=0.24	12=0.05	7=0.03	0
KJF4 (69)	2=0.03	0	15=0.22	2=0.03	1=0.01	0
平均 (1023)	0.02	0.01	0.19	0.03	0.05	0.00

表2から話者によって、ある程度ばらつきが見られるものの、大まかに類似の傾向が認められることが分かる。

以上、4名の話者が一つの談話において使用する談話標識の平均的出現頻度をまとめたのが、表2の最下欄の総平均である。その平均から、韓国人日本語学習者は、特に、引き込み形式「ネ」の数値が高く、頻繁に使用されていることが分かる。また、情報共有表示の「ヤハリ」、情報共有確認の「ジャンナイ(↗)」の類（ネ(↗)、ヨネ(↗)、ジャンナイ）もほかの形式に比べ、多用されている。ただし、これらの点は、日本語母語話者との結果と比較した上で初めて韓国人日本語学習者の特徴と判断される。その作業はⅦで行いたい。

次は日本人母語話者の場合である。

## Ⅵ. 日本人母語話者の談話展開の方法

### 1. 談話標識とその機能

日本人母語話者は説明的場面において、「ダカラ」「ソレデ」（以上、接続詞）、「ヤハリ」（副詞）、「ホラ」「ネ」「ウン」「エ」「ハイ」（感動詞）、「ネ」「サ」



(間投助詞)、「デショー」「ネ」「ヨネ」「ジャナイ」(終助詞・助動詞など)のような談話標識を使用し、話を進める傾向がある。これらの形式の品詞は以上の括弧内に記したように様々であるが、いずれも効果的な情報伝達に役立っていると考えられる。そこで、あらかじめこれらの談話標識の機能について考察を行った。ここでは、その結論のみを表3として示す。

表3 日本人母語話者が使用する談話標識とその機能

代表形	機能
ダカラ	<b>発話権取得・維持</b> ：談話の最初に現れ、相手の情報要求に対して発話権を受ける。また、談話の途中に現れ、続けて話を進めようとする意志を相手に示すことで、発話権を維持する。
ソレデ	<b>説明開始・累加</b> ：話の先頭に現れ、説明を開始する。また、談話の途中に現れ、説明を累加する。
ネ(間・終) /サ	<b>引き込み</b> ：そこまでの話を相手が理解しているかを確認、相手を話の中に引き込みながら話を進める。
ヤハリ	<b>情報共有表示</b> ：情報の共有を前提に話を進めていることを相手に示す。
ホラ	<b>情報共有喚起</b> ：以前共有していた情報や今後共有可能な情報について喚起する。
デショー(ノ) / ネ(ノ)(感・終) / ヨネ(ノ) / ジャナイ	<b>情報共有確認</b> ：相手に情報の共有を積極的に求め、確認を行う。
ネ(ノ)(感)	<b>念押し</b> ：情報の共有を再確認し、念を押す。
ウン	<b>自己確認</b> ：そこまでの話を自分の中で整理・自己確認し、そうすることで相手も納得させながら話を進める。

以下、このような談話標識の出現傾向を具体的事例と談話標識の出現頻度から明らかにする。

## 2. 事例分析

ここでも調査で得られた談話資料の中から、日本人母語話者の談話展開の特徴を典型的に表すと考えられる次の2場面を取り上げ、考察を進める。

### 資料3

JLF：ソニーは大丈夫じゃない、まだ。
JNF：でも <u>ね</u> 、結局海外市場のばすのはぜったいサムソンですよ、これから。
JLF：うん、なんで？ そうなってんの？
JNF：そう。 もう <u>ね</u> 、日本の企業日本でやることしかないんだよ。
JLF：追い抜かれた？
JNF：だから、もう <u>さ</u> 、なんか、日本は技術をよく作ってきたけど、ま、これからはお客様のニーズにこたえた作り方、売り方しないとだめ <u>じゃん</u> 。 <u>で</u> 、サムソンはそういうのが上手なんだよ。 ソニーはほんと技術とかあっても売り方とかが。

資料3から日本人母語話者(以下、話者)は韓国人日本語学習者(以下、相手)の情報要求に対して、様々な談話標識を使用し、話を進めようとしていることが分かる。まず、話者は「ネ・サ」で相手を話の中に引き込み、「ダカラ」で「ソニーはサムソンに追い抜かれたのか」という相手の情報要求に対して、相手から発話権を受け、「もう日本は技術をよく作ってきたけど、これからはお客様のニーズにこたえた作り方、売り方を考えなければだめだ」という話を進めている。また、「ジャン」でその情報の共有を確認することで相手と情報共有のもとで話を進めようとする傾向が認められる。また、「デ(=ソレデ)」で「サムソンはそういうのが上手なんだ」という説明を累加している。

### 資料4

JLF：外国語だから？
JNF：外国語だから関心もなんていうかな、 <u>やっぱ</u> 日本人だと、こ、なにげなく、こ、使ってる言葉で、 <u>で</u> 、何をわざわざ、こ、日本語そんな研究するのって感じがします <u>よね</u> (ノ)、日本人にしては。

JLF：ええ、私いつも聞きたかった、やっぱり。

JNF：ほら、外国人だったら、ほら、外国語としてそれを、こうね、なんての、専門的にもっと深く勉強しようと思うからすごく、うん、意味のあることだと思うけど、たとえば、日本人だったらどうなのかな。

もちろん、日本でもね、そうやって学者とかもいるし、研究してる人もたくさんいるけど、でも、その価値がやっぱり、外国人がするのと、ちょっと違うかなあと考えた。

そう思いますね。

JLF：私もあの不思議でした。

資料4で話者は「韓国人は日本語が外国語だから（日本語を研究してもいいと思うのか）」相手の情報要求に対して、様々な談話標識を使用し話を進めようとしていることが分かる。まず、話者は「ヤッパ」を使うことで、「日本人は母語なのに何をわざわざ日本語を研究するのかという感じがするのだ」という情報の共有を前提にしていることを相手に示すことで、相手と共有情報のもとで話を進めようとしている。また、話者は「ヨネ（ノ）」などのように情報の共有を確認するマーカーを共に使用し、さらにその情報の共有を確認することで相手と情報共有のもとで話を進めようとする傾向が認められる。また、話者は「デ（＝ソレデ）」で話を続け、「ホラ」で「外国人だったら外国語としてそれを専門的にもっと深く勉強しようと思うからすごく意味のあることだと思うけど、日本人だったら少し違う（ような気がする）」という情報の共有を喚起しながら話を進めている。また、話者は「ネ」でそこまでの話を相手が理解しているかを確認し、相手を話の中に引き込みながら話を進め、さらに「ウン」でそこまでの話を自分の中で整理し自己確認しながら話を進めている。また、話者は「ヤッパリ」を使うことで、「（もちろん日本でもそうやって日本語を研究している人もたくさんいるけど）その価値が外国人がするのとちょっと違うと思う」という情報の共有を前提にしていることを相手に示すことで、相手と共有情報のもとで話を進めようとしている。

このような談話展開のパターンは日本人母語話者の多くの談話資料から見られる。

次の3では、採集した談話資料全てについてこれらの談話標識の出現頻度を提示し、量的な検討を行う。

### 3. 使用頻度

今回、対象にした日本人母語話者の談話標識の出現頻度を調べた結果をまとめたのが表4である。表4から話者によって、ある程度ばらつきが見られるものの、大まかに類似の傾向が認められることが分かる。

以上、4名の話者が一つの談話において使用する談話標識の平均的出現頻度をまとめたのが、表4の最下欄の平均である。

表4 日本人母語話者の談話標識の出現頻度

談話標識 と機能 話者 (総文数)	ダカラ	ソレデ	ネ	ヤハリ	ホラ	ジャナイ	ネ(ノ)	ウン
	[発話権 取得・ 維持]	[説明 開始・ 累加]	[引き 込み]	[情報 共有 表示]	[情報 共有 喚起]	(ノ) [情報 共有確 認]	[念押 し]	[自己 確認]
JNF1 (349)	17=0.05	6=0.02	62=0.18	20=0.05	20=0.06	66=0.19	1=0.00	8=0.02
JNF2 (176)	7=0.04	6=0.03	63=0.36	15=0.09	19=0.11	28=0.16	1=0.01	6=0.03
JNF3 (316)	9=0.03	6=0.02	46=0.15	19=0.06	17=0.05	22=0.07	1=0.00	20=0.06
JNF4 (70)	16=0.23	13=0.19	30=0.43	7=0.10	0=0	8=0.11	0=0	2=0.03
平均 (911)	0.09	0.07	0.28	0.07	0.06	0.13	0.00	0.04

その平均から、日本人母語話者は、特に、引き込み形式「ネ」の数値が高く、頻繁に使用されていることが分かる。また、情報共有確認の「デショー(ノ)」の類(ネ(ノ)、ヨネ(ノ)、ジャナイ)、発話権取得・維持の「ダカラ」もほかの形式に比べ、多用されている。また、説明開始・累加の「ソレデ」や情報共有表示の「ヤハリ」、情報共有喚起の「ホラ」の類もよく使用されている。それに対して、念押し「ネ(ノ)」の使用は非常に少ない。ただし、これらの点も、韓国人日本語学習者の結果と比較した上で初めて日本人母語話者の特徴と言えるので、その作業はⅦで行いたい。

## Ⅶ. 考察

表5は本稿で検討した韓国人日本語学習者と日本人母語話者の結果(表2・表4の平均部分)を比較したものである。( )内の数字は、韓国人日本語学習者の数値を基準(=1)とした場合の日本人母語話者の割合である。談話標識の出現頻度にはそもそも種類によって違いが見られるため、このようにすることで、相対的な比較が可能になると考えた。

表5 韓国人日本語学習者と日本人母語話者の比較

談話標識 と機能  話者 (総文数)	ダカラ	ソレデ	ネ [引き 込み]	ヤハリ [情報 共有 表示]	ホラ [情報 共有 喚起]	ジャナイ (ノ) [情報 共有 確認]	ネ(ノ) [念押し]	ウン [自己 確認]
	[発話権 取得・ 維持]	[説明 開始・ 累加]						
韓国人 日本語学習者 (平均)	0.02 (1)	0.01 (1)	0.19 (1)	0.03 (1)	0 (1)	0.05 (1)	0.00 (1)	0 (1)
日本人 母語話者 (平均)	0.09 (4.5)	0.07 (7)	0.28 (1.47)	0.07 (2.33)	0.06 (6)	0.13 (2.6)	0.00 (1)	0.04 (4)

表5から両話者の特徴をまとめると、次のようになる。

- (1) 「発話権の取得・維持」をマークする談話標識（ダカラ）は、日本人母語話者では好んで使用されるが、韓国人日本語学習者の使用はそれに比べ、少ない。
- (2) 「説明開始・累加」をマークする談話標識（ソレデ）は、日本人母語話者では多用されるが、韓国人日本語学習者では非常に使用が少ない。
- (3) 「引き込み」の談話標識（ネ）は日本人母語話者でもよく使用されているが、韓国人日本語学習者でやや少なくなっている。
- (4) 「情報共有の表示」を行う談話標識（ヤハリ）は日本人母語話者に比べ、韓国人日本語学習者で少なくなっている。
- (5) 「情報共有の喚起」を行う談話標識（ホラ）は、日本人母語話者では使用されるが、韓国人日本語学習者ではまったく使用されおらず、両者の大きな違いとなっている。
- (6) 「情報共有の確認」に働く談話標識（ジャナイ(ノ)など）は、日本人母語話者でよく使用されるが、韓国人日本語学習者では少なくなっている。
- (7) 「念押し」の談話標識（ネ(ノ)）は、どの話者においても、そもそもの使用頻度が低い。
- (8) 「自己確認」の談話標識（ウン）は、日本人母語話者で使用されるのに対して、韓国人日本語学習者では使用されおらず、この形式も両者の大きな違いとなっている。

## VIII. まとめと今後の課題

本稿では談話標識の出現傾向から韓国人日本語学習者の談話展開の方法を日本人

母語話者との比較を通して明らかにした。

検討の結果、談話標識の使用頻度は日本人母語話者で高く、韓国人日本語学習者で低いことが明らかになった。これは言い換えると、母語話者は効果的な情報伝達のために学習者より談話標識を多く使用していることであり、まだ日本語を学習している学習者は母語話者に比べ、少なく使用していることを表している。すなわち、母語話者は談話標識をたくさん使用することで、相手と円滑なコミュニケーションを行なおうとしているのであり、そうすることで相手と円満な関係を維持しようとしているのであろう。しかし、まだそのような戦略の習得段階にある学習者は談話標識の使用率が母語話者に比べ、低くなっており、そのような点が一つに原因となって両話者のコミュニケーションにおいてコミュニケーション誤解や摩擦、あるいは違和感をおぼえさせているのではないかと考えられる。実際、インフォーマントとのフォローアップインタビューにおいて、談話標識の使い方によって、違和感を感じるという答えが両話者から多数出ており、この点については、今後アンケート調査などを行い、さらに詳しく検討することが必要であろう。

また、今後は人数を増やし、今回取り上げた談話標識以外の形式についても注目し、考察を進めていきたいと考える。

## 【参考文献】

- 有賀千佳子 (1993) 「対話における接続詞の機能について-『ソレデ』の用法を手がかりに-」 『日本語教育』 79
- 伊豆原英子 (1994) 「感動詞・間投助詞・終助詞『ね・ねえ』のイントネーション-談話進行との関わりから-」 『日本語教育』 83
- 大島弘子 (2001) 「ホラの機能について」 『日本語教育』 108
- 岡本真一郎・多門靖容 (1998) 「談話におけるダカラの諸用法」 『日本語教育』 98
- 岡部寛 (1998) 「ダカラとソレデの違いについて」 『現代日本語研究』 5
- 沖裕子 (1993a) 「談話型から見た喜びの表現-結婚の挨拶の地域差より-」 『日本語学』 12-1 明治書院
- 沖裕子 (1993b) 「談話からみた東の方言／西の方言」 『言語』 22-9 大修館書店
- 川口良 (1993) 「日本人及び日本語学習者による副詞『やっぱり』の語用論的習得について」 『日本語教育』 81
- 川口良 (1998) 「日本語の談話展開の方法に関する一考察」 『秀明大学紀要秀明研究学会国際研究論集』 11-3, pp.60-77
- 河内彩香 (2009) 「日本語雑談における話題の展開方法」 『東京大学留学生センター教育研究論集』 15

- 久木田恵 (1990) 「東京方言の談話展開の方法」『国語学』162
- 琴鍾愛 (2005) 「日本語方言における談話標識の使用傾向-東京方言、大阪方言、仙台方言の比較-」『日本語の研究』1-2 日本語学会
- 琴鍾愛 (2008) 「談話における「ネ」の機能-仙台方言の説明的場面で使用される談話標識としての機能-」『日本文化学報』38 韓国日本文化学会
- 小西いずみ (2003) 「会話における『ダカラ』の機能拡張-文法機能と談話機能の接点-」『社会言語科学』6-1 社会言語科学会
- 佐藤勝之 (1996) 「談話展開の2つの型」『武庫川女子大紀要 (人文・社会科学)』4 4、pp.19-26
- 高原脩 (1993) 「談話標識の語用論的機能」『英語青年』139
- 田窪行則 (1995) 「談話管理の標識について」『文化言語学-その提言と建設』三省堂
- 中北美千子 (2000) 「談話における『ダロウ』と『デショウ』の選択基準」『日本語教育』107
- 西野容子 (1993) 「会話分析について-ディスコスマーカを中心として-」『日本語学』12-5 明治書院
- 橋本修 (1992) 「終助詞『ね』の意味の型とイントネーションの型」『日本語学』11-11 明治書院
- 蓮沼昭子 (1991) 「対話における『だから』の機能」『姫路独協大学外国語学部紀要』4
- 浜田麻里 (1997) 「話し言葉におけるダカラの分析試論」『大阪大学留学センター研究論集 他文化社会と留学生交流』創刊号
- 深尾まどか (1999) 「終助詞『ヨネ』について」『日本語教育研究』38 言語文化研究所
- 三牧陽子 (1993) 「談話標識の種類」『視聴覚教材と言語教育』6 大阪外国語大学 AV技法研究会
- 宮崎和人 (1993) 「『ダロウ』の談話機能について」『国語学』175
- 宮崎和人 (1996) 「確認要求表現と談話構造-『～ダロウ』と『ジャナイカ』の比較-」『岡本大学文学部紀要』25
- メイナード・K・泉子 (1993) 『会話分析』くろしお出版
- メイナード・K・泉子 (1997) 『談話分析の可能性』くろしお出版
- メイナード・K・泉子 (2004) 『談話言語学』くろしお出版
- 森本順子 (1994) 『日本語研究叢書7 Frontier series 話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版
- 山根智恵 (2002) 『日本語研究叢15 Frontier series 談話におけるファイラー』くろしお出版
- 李麗燕 (2000) 『日本語研究叢書 12 Frontier series 日本語母語話者の雑談における物語の研究-会話管理の観点から-』くろしお出版
- Bruce, Fraser. 1990. "Perspectives on politeness", Journal of Pragmatics 14.
- Deborah, Schiffrin. 1987. "Discourse markers", Cambridge University Press.

## 要 旨

本稿では談話標識の出現傾向から韓国人日本語学習者の談話展開の方法を日本人母語話者との比較を通して明らかにした。

検討の結果、談話標識の使用頻度は日本人母語話者で高く、韓国人日本語学習者で低くなっていることが明らかになった。これは言い換えると、母語話者は効果的な情報伝達を行うために、学習者より談話標識を多く使用していることであり、まだ日本語を学習している学習者は母語話者に比べ、談話標識を少なく使用していることを表している。すなわち、母語話者はたかさんの談話標識を使用することで、相手と円滑なコミュニケーションを行なおうとしているのであり、そうすることで相手と円満な関係を維持しようとしているのであろう。しかし、まだそのようなストラテジーの習得段階にある学習者は談話標識の使用率が母語話者に比べ、低くなっており、そのような点が一つに原因となって両話者のコミュニケーションにおいて誤解や摩擦、あるいは違和感をおぼえさせているのではないかと考えられる。

今後は対象を広げ、ほかの談話標識にも注目し、研究を進めていきたいと考える。

キーワード：談話標識の出現傾向、談話展開の方法、韓国人日本語学習者、日本人母語話者

투 고 : 2014. 11. 30  
1차 심사 : 2014. 12. 13  
2차 심사 : 2015. 1. 3